

## 「復興とは何か」を考える委員会(第2回) 議事録

■日時:2009年6月13日 13:00~16:30

■開催場所:関西学院大学 梅田キャンパス 1004号室

■会の名称:「復興とは何か」を考える委員会

■主催:関西学院大学災害復興制度研究所、日本災害復興学会

■参加者:山中茂樹(関西学院大学復興制度研究所)、近藤民代(神戸大学)、室崎益輝(関西学院大学)、村井雅清(被災地NGO協働センター)、永松伸吾(人と防災未来センター)、渥美公秀(大阪大学)、矢守克也(京都大学)、菅磨志保(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)、山地久美子(関西学院大学復興制度研究所)、宮原浩二郎(関西学院大学)、魚住由紀(フリーアナウンサー)、青田良介(財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構学術交流本部大学連携事業課長)、石川永子(人と防災未来センター)、宮本匠(大阪大学大学院)安富信(読売新聞大阪本社)

■報告者:室崎益輝(関西学院大学)、村井雅清(被災地NGO協働センター)

<永松>

第一回主要論点の確認と、研究会の進め方について3点の確認(何が正しいのか白黒をつける場ではない、違和感は口に出す、わかりやすい言葉で説明する)

○報告者1 室崎益輝 関西学院大学

時間が限られているので、今日の話の背景は、報告フォーマットに書いているので見ていただければいい。一言でいうと、大昔から復興をやっているということ。寺田寅彦に出会ったのは、25、26歳のとき。関東大震災の論文を読んでから。私が思っている過去の重要な論文を4つフォーマットの下に書いている。一番目は、「都市の災害復元力に関する考察」というもので、1985年の都市計画学会に提出したが門前払いだった論文だ。復元力について書いている。そんなもの証明されているのかと研究論文として認められなかった。仕方ないので、1986年の建築学会の審査のないところに出している。あとで、ラファエルの復興曲線カーブがでてくるが、それは1986年で、私が論文を出したのと全く同年。ラファエルの復興モデルより先に書いたはず。しかし、今考えれば、その時は減災という概念の方が強かった。被害を少なくするためにという視点が強い。私にとって記念すべき論文。

その次は、阪神の直後に「新都市」という雑誌に書いたものだ。3番目は、「復興都市計画論の再構成」。この論文の限界は、復興は都市復興だということ。都市空間や、住宅の復興であって、ここでは、生きがいなどが触れられていないことが限界。その最後に事前復興を書いている。「事前復興」の最初

の定義がなされている。また、段階復興論についても述べられている。私が言っている事前復興とは、災害が起きる前から町を安全にしておくということ。東京の事前復興の考え方もようやくここに戻ってきたと思っている。これは、震災直後の2年目か3年目に書いたもの。その2年間の間に、サンタクルーズや唐山などに行って学んだ。唐山では、ヤオさん(人名?地名ヤオシャン?)という自分と同年代の都市計画家の4段階理論を学んだ。そして、越山さんと城崎について学んだ。これらから、今後の復興計画はどうあるべきかを考えた。物語復興の考え方の原型となった。とはいえ、ここまでは都市計画という文脈に縛られている。

そして集大成が最後の「災害後の復興のあり方について」という論文。昨年中国に二回行く機会があって、向こうの都市計画の専門家と議論しまとめたもの。今までの限界はここでかなり解消されていると思う。都市復興だけでなく総体を論じることが重要で、社会的なしくみ、文化やくらしの重要性についても書いている。復興の制度や体制という社会的な仕組みについても言及している。

前回の中林さんと木村さんの意見とかなり似ているので、私の印象では、あまりみんなの意見が異なるようには映らない。それぞれの意見に噛みあわせて今日は議論してみたい。

私にもある癖なのだが、何か現象をパターン化し、名前をつけたくなくなってしまう。それがひとりあるきしてしまう。すると、とても観念的な世界になってしまう。復興は目的学であって、実学の世界。目的から離れると宙に浮いた議論になってしまう。復興の形式的な定義はみんなとあまり変わらないと思う。しかし、考えが別れるものが二点ある。一点目は、どのような復興がよいのか、という価値の問題。そして、二点目はどのように復興するのかという方法論の問題である。

前回の議論では5W1Hの議論があった。最も重要なのは「なぜ」のWHYと、「だれ」のWHO。WHOは、「誰が」というのも大切だが、今日はあえてここには述べていない。「私たちの社会が」としている。重要なのは、「誰のために」。最終的にはどのような復興するのかというところにもっていきたい。

時代背景についても述べる。復興計画を担っていたのは主として都市計画の担い手であった。ある時期には都市インフラがとても大切な時がある。住宅再建が大切だったことがある。何が言いたいかというと、「関東大震災はハコモノ主義だ、けしからん」というのではなくて、あの時代は住宅や道路が国民にとって大切だった時代だということ。関東大震災では、庶民の要求で「道路をつくれ」だったが、阪神大震災の時は、庶民の要求は「道路をつくれ」ではなかった。むしろ「つくるな」と言った。それが正しいかどうかは別にして。

都市の中に人間がいる、人間の復興というキーワードをくれたのが阪神大震災。都市復興、経済復興の前に人間の復興がある。復興は都市が復興するのではなくて、都市のなかに人間がいる。人間が復興するのが大切なのだ。しかし、人間の復興には都市復興、経済復興などが複雑に絡んできて、そのプロセスには複雑系の科学が関係してくる。

復興の性格について。復興は防災の一部かどうかということ。そのまえに、復興はまさに社会を創るという営みである。ただ、災害の後に行われるということだけなのだ。復興は防災という仕事よりはるかに大きな仕事なのだ。復興は社会創造そのもの。どういう社会をつかっていくのか、それにつきる。では、一般の地域づくりとどう違うのか、3つある。一つ目に「破壊や疲弊からの出発」。これは客観的なもので誰も否定できないと思う。壊れるということには、責任と反省がある。社会構造的な問題、人間の愚かな発想の間違いなどがある。災害ではみんなが被害を受ける。その人たちが立ち上がるために何か支援がいる。そこに、いろんな意味での支援やサポートが伴う。災害がなければ、それぞれが自分で頑張れる世界があるのだが、もうひとつ書いていないのだが、これは都市計画のエゴな考えになってしまうのだが、みんなが壊れてくれた方が、全部燃えてしまった方が、計画はやりやすいということ。世界中の優れた都市計画の例は、全部災害の後である。戦争や大火の後。その後にしか、理想的な町は出来上がっていない。すべてが灰になった後、それが大きなチャンスを与えてくれている。チャンスという言葉は慎重に使わなくてはならないがひとつの機会と考えられる。それが破壊の重要なところ。二つ目、復興はニュートン力学で考えることができない、「時空間制約を伴う複雑系システム」であるということ。「はやい、おそい」という単純系の科学の話ではない。急がば回れという議論もある。スピードの議論は難しい。住宅再建の速さ、強引さ、地域特性など限られた時間の中でいろいろな要素を活性化して昇華するシステムをどうつくるかが重要である。経済復興と住宅再建の順序など一筋縄ではいかない。ちょっとした匙加減でいくらでも変わってしまう。多様な要素が絡み合っていて、複雑怪奇でよく分からない、分からないけど、それなりに手順をふめば目指すべきところにいける。復興の場合は時空間の制約、特に時間の制約が大きい。通常なら20年かけてじっくりとやられるものが、5年でやらなければいけないという制約がかけられることもある。すると、急ぐあまりにでてくる失敗もある。四川の場合も、住宅再建が早いのは評価しているが、あわてて徹夜で計画をつくっている。地域の声を無視して。それでも、一日でも早い方がいいというのも分かるのだが、限られた時間で物事を進めていくという難しさがある。いろんな要素が限られた時間の中で影響を与えていって、ぐっと飛躍するという仕組みをどう作ることができるか。その次は、みなさんがいうことだが「減災サイクルの1つの過程」であるということ。起こった後の予防、そして起こる前の予防ということ(事前復興から事後復興というプロセスが重要である)。これは、事前復興で考えていること。

復興の類型化について。重要なことは大きな意味での復興と狭い意味での復興を分けて考えなければならぬと思っている。自分は狭い意味での復興を今の時代は目指すべきだと思っている。新しい論文でも復興が復旧とどう違うか、新しい価値観を生み出すことなど言ってしまうているが、復興とは必ずしも起こる前より良くなることなのかと思う。被害が大きいかどうか、そしてそこには現代の社会がどのような方向に向かっているのかということがある。自分は「答えの無い世界が好き」という傾向があると自覚しているのだが、その時代時代に直面している状況というのがある。そして、最後は被災地がおかれている状況というのがある。四川は経済の厳しいところがあり、理想だけいっていても難しい。どの方向を選ぶかは重要な政策選択。大規模な被災の場合は、狭義の復興である「大変革を伴う機能回復の運動」を選ぶ必要がある。

復興ベクトルの質と量による類型を考えてみた。横軸は安全の質、縦軸は建設物の量。まんなかの被災の状況がゼロだった場合にもどのような社会を目指すかという事前復興という考え方が生まれてくる。復旧と復興の概念の整理につかえる図ではないかと思う。復興のベクトルは、「被災の状況」「時代の状況」「地域の状況」という3つの要素によって変化するのではないか。例えば被災の規模が大きかった場合は復興であり規模が小さい場合は補強という考え方になる。また、たとえ被災がゼロであったとしても事前復興という考え方が活けると考えられるし、被災の度合いによって原型復旧や改良復旧という考え方の違いもでてくるだろう。

今まで申し上げたことは、復興の目的、何のために誰のために、その次に大切なのは、「いかにするか」ということ。2つか3つ、「いかにするか」という問題がある。まず、どのような態度で臨むのか、次に手段や戦略の問題。ここでは、視座というどういう態度で臨むのかを考えたい。歴史性と地域性、世界が画一化する時代に地域に根づいた固有性を大切にしなければならないということ。つぎに、持続性と共生性、環境問題のサステナビリティの問題もあるし、多文化共生の話もある。地球全体がどうあるべきかという問題。三番目は、自立と自治。そこに住む人が自分たちで決めて、自分たちで将来を決定していく。これら現代社会で失われていることが復興の中でとりもどすということを大切にされなければならない。コミュニティの持続は大切であり、復興の規範や原則だと思う。

その次が、HOW。私はプロセスが一番最後、(正確には最後から二番目)においてしっかり考え実践することになっている。ややもすると、復興をどのようにするかというプロセスを先に議論してしまう。プロセスというのは、目標や理念などが定まった後で、デザインしていけばいいものだと思う。包括性というのは空間だけではないし歴史文化を含めたものであり、連続性は新しい街を作る力を養うということ。補完性は災害が起きると多くの被害を受けた人が無力に陥るため、災害は格差をより広げること、そこで市場性の論理だけに任せてしまうと、弱者はより疲弊してしまう、そこを補完するシステムが必要であるということ。共創性はみんなで力を合わせてつくりあげていくということ。そして、戦略性、限られた時間でどのような順番で行うかということ。最後に変革性でとどのつまり社会変革とすること。復興バネは、阪神淡路大震災のあとで知ったこと。ラファエルの「災害が襲うとき」を読んでいるときに震災にあった。災害ユートピアの崩壊したあと、バネが働かないと、前のところにはいかない。すると、どのようにバネを働かせればいいのか。バネはラファエルの図には出てこない。復興バネの考え方は自分のオリジナルだと思う。地震一年後の都市計画学会でこのようなモデルを出したと思う。どうすれば、前より高いレベルにもっていくことができるのか。

そして、このモデルだと時間的问题があり、総論と各論の問題がある。総論は早く決める、各論はゆっくり決める。これはサンタクルーズの報告書の中にあったこと。なんでもかんでも、はやくやったり、ゆっくりやればいいということではない。この話は前回の議論に関連することだ。このモデルは、作用のモデルである。人間がどのように働きかければ社会がどのように変化するかというダイナミズムのモデルとしてとらえることができる。もうひとつのバネとして、災害ユートピアがくずれないようにするバネはな

いかということも考えているが、それはまだ分かっていない。最後は、そうしたプロセスを支えていこうと思うと、制度やお金がいるということ。

#### <ディスカッション>

魚住 前回の振り返りもしていただきよくわかりました。確認したいのは、復興の性格の中で、破壊からの出発、ゼロからの出発があったが、全部が壊れてしまえば理想的な街をつくりやすいということがあった。

室崎 大阪であれば木造密集市街地の上町大地が修復型の手法を用いている。安全にしたい。災害がなければ、ゆっくりやっていく。皆考えが違うから、「うちはいますぐ」、「うちは15年後」とバラバラになってしまう。通常は、バラバラに動いているものコーディネートできない。考え方が違うから建替え時期をコーディネートするのが実務上重要である。しかし、焼けてしまうと、みんな同じ状況になるので、議論したり考える条件が外的に与えられてしまう。議論する、一緒に歩調を合わせて行動する機会となる。地上げは平常時ではとても難しいが、全部焼けてしまうととても楽。これは、危険なことだと申し上げている。ただ、みんな同じスタートラインに立てるという点で、チャンスでもあるということ。

魚住 見た目としていいまちがつくりやすいということ？

室崎 するどい。ハードなものをつくる専門家(人間)の習性だということは認識している。形を作ることがいい街をつくるということにつながっている。しかし、つくるプロセスには、こころも共にしなければならぬ。

魚住 私は違和感を感じる。そういうまちが本当にいいまちなのかと。

永松 復興の目的で、何のために復興かの答えとしては人間復興でいいのか。

室崎 私は抽象的には社会進歩と人類の幸福とっている。

永松 災害復興は日常から連続している手段なのか。

室崎 災害の前と後で、違う目標をもつことはある。災害というひとつのエポックの中で災害前と同じ価値観すすむかということとはわからない。

永松 「誰が」より「誰のために」が重要ということだが、この「誰のために」は人類でいいのか。

室崎 もう少しいうと、今までの文明の成果を受けとれていない人ということかもしれないが、まあ人間。特定の人のためであってはいけないということ。

永松 同時に、規範のところでは「自分たち」でやるとおっしゃっている。ここでいう「自分たち」とはだれなのか。

室崎 すべての人のための復興なら、すべての人たちになるのだろうが、しかしそこに格差が入ってくると交通整理が必要。自治の視点も必要。言葉遊びかも知れないが。

津久井 スピードの話で、総論と各論の話があった。総論という考え方に共感する。復興ベクトルのところで4つの類型があり、被災の状況を抜くと地域の状況を考えられるということだが、事前復興論とは、都市計画にとらわれずに人類全体について考えないといけないということなのか、そこまでのことを総論として考えなければならないということか。

室崎 総論は、最終的なビジョンということだから、そう。

津久井 どうしても被災すると目の前に問題が視覚化されているからわかりやすいが、なにもないところで議論するのが難しい。何もなくてどう議論するか。事前復興の時に、どのようにしていろんな要素を考えられればいいのか。

室崎 自分は、事前復興は各論で考えている。阪神淡路大震災みたいなのがきて、起きた後で家を建て替える。それなら、起きる前にたてればいい。アルコール中毒になってから医者に行くのではなく、その前にアルコールを飲まないようにすればいい。いいたいことは、石原知事が言っているのは東京の脆弱な地域が焼け野原になることを暗に想定していて、そのときにドンと提示できる計画として、今から復興計画をたてておくということ、それは災害待望論で違和感がある。それだと、たくさんの方が死んでいる。むしろ、起きる前に家を丈夫にしておく。

矢守 室崎先生の話や中林先生の話聞いて、事前復興にあえて議論したい。これをややこしい言葉で前の学会でいったのだが、今日はわかりやすく「前もってやっておきたい病」とあえて名づけると、これは緊急地震速報と同じ動機があると思う。「前もってやっておきたい」というモチベーションですんでいる。いくら前もって準備をしておいても、考えきれないことが起こるということに、災害の人間や社会について価値があると思う。前もって社会が準備しようとしても残るものがあるんだということを復興論の中で重視しておかないと、この種の話が、人間は何でも事前にはできるのだという思い上がりに通じる怖いものになるように思う。

室崎 その感覚は重要なこと。状況がどんどん変わっていく、その中で、どのようにやるかという複雑系の話。計画通りものごとはいかない。状況ごとに最も大切なことを行う。それは原点。しかし、もともと脆弱性がある地域であることがわかっているのならば、それを知っておくことで不確実性を議論でき、後から起きる現象が、とんでもないことが起きるのではないのではなくて。ある程度絞り込まれたものになるようにはできるはず。

矢守 災害情報でも、出すのは大事だが、最後の最後はまちがうところもある。情報の精度を上げるといこととセットにして、それでも考えきれないことが起こるといことをともしておかないと、社会完璧主義者になってしまって、災害の一番の本質を見失うことがあるのではと思う。

○報告者 2 村井雅清 被災地NGO協働センター

中林先生から始まったこの委員会で、4番手に私。私の立場はあくまで災害ボランティア、あくまで現場の話をしたい。配布した「市民がつくる復興計画」は、「市民とNGOの『防災』国際フォーラム実行委員会」で私たちがつくった。いつも私はこれをバイブルのように持ち歩きながら被災地を見ているつもり。もうひとつは、「復興まちづくりの評価手法に関する共同研究」の最終報告書で、UNCRD がだしたもの。13年たって、今やから言えるということがぼろぼろ出てくる。そのことは聞きようによってはちょっと待てよと思うが、大事だと思うのでお配りした。

復興の目的は、第一回神戸宣言の中で書かれている「市民主体の市民社会を創造する力を養い、育くみ、もう一つの社会を築く営み」と考えたい。もうひとつの社会とは、減災サイクルの図で説明する。おそらく、室崎先生の目指す社会と似ている部分が多くあるのではないかと思う。そのプロセスには、「語りだす」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」の5つのキーワードがあり、すべて重要だと思っている。

減災サイクルの中心にある命だが、第1回のフォーラムで、木に名前を書いてもらった。それぞれの名前の大きさが同じということがみそ。また、1年半かけて、がれきをトラックに積んで全国を回る活動をした。そこで、いろんな仲間と出会い、その後のネットワークができた。私の原点は、小学校6年生が書いた数行の詩、ここにすべてのキーワードが詰まっている。

「きっと神様の罰があたったんや」

「もう、モノはいらん。ぜいたくはいらん」

「水も、電気も、何もかも、ムダに使うとった」

「消防も、警察もこうへん。いざというときは、やっぱり、ご近所さんや」

「これからは、自然をいじめんのやめとこ」

(市民がつくる復興計画より)

最後の部分は、方丈記や、人の命も大切だが人の命だけ考えていいのだろうかというところにもつながる。

10年後に、また神戸宣言を出した。3つ。一つ目は、「もうひとつの生き方を選択する」。もうひとつの住まい方、もう一つの働き方など、すべてにつながる。二つ目は、このフォーラムの代表であった芹田健太郎が言った「世界人権宣言ですべての人が平等だといったが、被災地ではそうではなかった」ことから、「最後のひとりまで支える」ということ。三つ目は、「震災文化を伝えていく」ということ、これは日々の体験の中で考えている。

川はあふれるもんだ、家は壊れるもんだと考えることはできないかと考えている。建築基準法の中に、日本の家には粘りが必要と書いている。しかし、誰がこの粘りにこだわってきたらうか。同じように、川はあふれるものだという、あふれるものという前提でつきあうことで、武庫川流域委員会のようにダムの凍結のような提案ができる。でも命を守らなければならないということを考えると、最後は宗教の話をもってこなければならぬのかとも思っている。梅原猛が、アイヌの世界の「熊送り」の話をだしている。

縄文文化は共生の文化です。人間穴けが特別ではない。熊も人間と同じようなものだという事です。熊は、あの世に行ったら人間と同じような格好をしています。ですから、たまたま人間としてあらわれたときに、ミヤング(アイヌ語)を持ってきてただけだと。熊のおいしい肉や皮をみやげに持ってきてただけだということです。「ミヤング」から「みやげ」という言葉が出てきたのですが、熊は、みやげを持ってきたマラプト(アイヌ語で「客人」)であると。ですから、人間は、そのミヤングすなわち熊のおいしい肉や皮をいただいて、そして、魂送りをして、あの世へ熊を屈ける。あの世で、その熊は「人間に丁重にされて、送られてきた」と言う、また、あの世の熊が「それじゃ、わしも来年いこうか」と言って、その次の年にまた熊がたくさん捕れる。大体こういう発想です。「貝塚」というのは、まさに貝の墓であり、ごみ捨て場ではありません。貝の霊をあの世へ送ると、貝の霊は、あの世で「人間に送られてきた」という話をするから、また次の年にたくさん貝がとれるという考え方です。

これは、人間も、植物も、動物も、皆大きな自然界の一環で、人間だけが偉いのではない、そして生きとし生けるものはすべて共存、命の循環で、あの世に行って、また帰ってくる、大きな循環であるという考え方です。デカルトの考え方のように、個人が中心ではありません。大きな生命の流れの中に私たちはいるのですから、昔の遠い祖先のまた生まれ変わりです。あの世へ行って、また生まれ変わってくるという大きい「共生と循環の思想」です。こういう思想が、新しい人類の思想でなくてはならないのです。

(梅原猛「新しい文明と日本」 21世紀文明展望シンポジウム基調講演、2005.3.14)

人間が次の人に残していくために、熊送りがある。そういうことをどこかで思わないといけぬ。だから、減災サイクルの命はすべての生き物ということになる。すると、昔から空海が言っていることにつながる。

鮭の話を考えて時に、あなたの命を頂くのだと考えている。鮭は産卵時に6秒心臓を止めるそうだ。こんなことして鮭は生きてるんだな。生き物はみんなそう。人間だけが生かされているのではない。



復興のプロセスの中で、復興の主語は人間のためと思う。「被災者」だと被災者にはいろんな人がいるので100%にならない。結局は人間の社会にとってということが大切。被災者が何を望んでいるかではなく、自由が何かということ。被災者が何を必要かということになると、自分もできないくせに「自立」「自立」という話になる。実践の中でアマルティア・センが言っていること(「君がスラムの人たちを前にして考えるべきことは、彼らのニーズは何か、ということではなく、もし彼らが本来の力を発揮する自由を与えられたらばどう行動するかということ、そして君はどのようにしてその自由を拡大できるかということである」)を実際にやっていくのもなかなか厳しいのだが、たとえばアフガニスタンでブドウの支援をしているが、私は現地の人に「アメリカとイギリスと日本があなたの国が空爆してしまい、あなたたちの仲間を殺してしまった」と言った。その時に彼は、「自分たちはそれ以上に世界に迷惑をかけている」と、ケシ栽培の話をした。こうした議論をしながら、人間が解放されるとは何かを考えていかなければならないのかと思っている。

最後の一人ということをずっと考えている。ぴたっとくる論理的な説明が難しいが、ひとりひとりの意見を大切にす、すると合意形成が重要で、そうなると支えあいが必要ということになる。似田貝先生がまとめたところにある、「人間の限界性」、限界があるから他者の振る舞いをみとめるということ。この中で自分が限界だが他者のふるまいをみとめて、他者との関係を切らないということが出てくる。どんなことがあっても、被災者と関係を切らないということがでてくる。私がAに限界があっても、Bが支えることができるかもしれないということ。ひとりひとりにこだわるのはむずかしいが、それぞれが目の前にいる人と向き合うことが大切。震災の当時、目の前にいる被災者の人に、ボランティアがそれぞれ自分で考えて向き合った。被災地は混乱していたが、それは行政が混乱している中で、ボランティアは自分に何ができるかをしっかり考えて行動していた。私たちの時には一日70人ほどのボランティアが来ていた。それぞれがかなり大変なケースの被災者に寄り添っていたことを思い出している。

減災サイクルを考える中で気になったのは、「開発」という言葉が、いろんな意味で使われている。開発(development)は、もともと封筒(envelop)からきている。「開発とは、封筒を開けて中から潜在的なもの、未来、希望潜在力、可能性、夢を出してくることはないか?」といった人もいる。開発という言葉が乱用されているので、「もうひとつの社会」といった。阪神大震災の後に13万7000戸が倒壊して27万8000戸できたということ、これは復興の範疇を超えているのではないかという議論がある。奥尻の津波があって、防潮堤をつくったが、ここの人たちにとって、海と一緒に生きていかなければならないのに、朝起きて海が見えないという状況をどう考えるか。開発という言葉で簡単にこのようなものがつくられてしまう。

都賀川がゲリラ豪雨で被害を受けたが、親水公園という名をもって、どれだけ川とのつきあい方を考えてきたのかを考えることが大切。北海道のハサンベツでは、もともと曲った川の形に戻したりもしている。やれるところとやれないところには法律の関係があるそうだが、ハサンベツは20年かけてやっている。やろうと思えばやれるのではないかと思う。

タイのクラブー島、青年はイカカゴをつくっている、「そんな小さいカゴでは、いくつもとれないだろ」というと、「自分が食べる分だけあればいい」と返事が返ってきた。日本の場合はとにかく遠くまで行ってまで乱獲している。海によって生きている人が、海を壊してはどうしようもないなと思う。神戸は今年はいカナゴがとれないそうだが、とれないからナマコの密猟をしている。「商い」、「生業」というものを考えないといけない。

穴水のいさざ漁、熊本川では昔は川を堰き止めて根こそぎとっていた。さすがに漁業組合が決まりをつくった。穴水のとり方は、四つ手網を沈めて、その上に魚が来たら上にあげてとる。こういうことがずっと続けておられることがすごいなと思う。「のんびり」という意味の「じんのび」と言っていることはこういうことなんだなと思った。

東北タイで、地域の自立経済を確立するために、農業に取り組んでいる人たちがいる。ここは経済がどのようになっても影響を受けない農業を目指している。アグロ・フォレストリーというそう。オーストラリアやインドネシアのジャワでもこうしたことに取り組もうとしている。日本でも、少しずつ取り組んでいる地域が出てきている。

真野、御蔵、西須磨のまちづくりをもういちど振り返りながら考えたい、それでよかったのかどうか。阪神淡路大震災という成熟した地震を経験した被災地では避けられない課題だと思う。

木村先生は住まいということをいったが、中国四川で、伝統的な木造住宅による再建をしているところがあって、そういうところを応援したいと思っている。レンガ住宅が普及しているところで、どう被災者を説得していくか。7軒のうち4軒が最終的に木造にした。それは、吉椿さんが説いていった中で、選択した。中国の写真を見て感じたこと、「くらし」があって「住まい」がある、「住まい」があって「くらし」があるのではない。みんなで立てるといことが当たり前にある。「くらし」の延長に「住まい」がある。日本も「結」という仕組みで変わらないものがあると思うが、ジャワでは、住宅にその地域でとれるヤシをつかう。景観はインドネシア独特のもの。なぜ木造を強調するか、朝日新聞で紹介された4段階の備え。本当に木造は壊れないなと思う。

ネパールに先日行った。ヒンズー寺院や仏教寺院があるが、典型的な建て方を見ると、2000年たった今も、ものすごく貧しい人の家の建て方にも継承されている。古い建て方だが、壊れなさそう。これを残していくという選択もあるのではと思ったが、政府はコンクリート建てを進めているらしい。その地域にあった暮らし方の延長に住まいがあるのではないかと思うので、そこを尊重していくべきではないかと思う。寺院の周りのある家も、寺院と同じ作り方をしている。いろんな文化が混在している様子が、私の好きな「なんでもあり」に通じるものがあった。

耐震の伝承を実際に目で見せながら進めてきたが、ここの地域の人、石工の事業協同組合を作られ、広がっている。インドの国内はもちろん、海外の災害の時にも、耐震をつたえている。インドのグジャラートの時に、あまりあせらないでゆっくりということを提案したのだが、インドのNGOはサイクロンが

来るからはやくなおすといった。インドを歩き回ると、ボンガという古い家が残っている、丸いから強いのではないか、仮設にも利用できないかといったがだめだった。じっくりゆっくり考えようということは、やはり住民が合意して考えて決めればやってやれないことではないと思う。

96年のハビタットで学んだ草地さんの言葉、「住まいとはその空間で幸せな人生が築けること。それを「住まう」という」。しかし、神戸では震災の後の復興住宅、高層ビルの中で住まわされている。朝日新聞が報告しているところによると生活保護16%だそうだ。

くらしの再建では、まけないぞうを続けている。中越、宮城、柏崎にも広がってきた。こういうことがひとつのきっかけになって、それぞれの地域で地域にあったものがでてくるのではないかと思う。それぞれの地域でやると、想像もしなかったものが出てくるのが面白い。三条の中ノ島で講習をするのに、山古志の樺沢さんが仲間を連れて教えに行ったところ、150人も集まった。こういう想像もしなかったことが出てくるから面白い。

兵庫県は、コミュニティ・ビジネス離陸応援事業を未だに続けていて、唯一ほめたたえたい事業だ。ここから元気が生まれてくると思う。

もうひとつの働き方、個人でいうと、石井富貴子さん、黒沢さんも結局は財団をやめたし、国枝さんも典型的なサラリーマンから転身した、森崎さんも次から次に新しいアイデアを出す。

CODEも開発支援という分野に入ってきた。水を確保するためのプロジェクトにも関わりだした。アフガニスタンでも新しい段階に入ってきている。山梨の有機農業でやっているブドウ農家、そこで40年間肥料もやらないというところで、世界的なブドウ品種の栽培を進めている。なぜここで研修をしたかというと、この人のルーツはアフガニスタンのブドウだったから。本当は、インドネシアの災害の後も、こうしたことをやりたかったのだが、この前インドネシアで藍染復興に取り組んでいる人が新聞に出た。本当にいろんな人がいるんだと思う。

それから、もう一つの考え方の一つの紹介だが、災害時要援護者の問題で、廣井先生がひとりひとりに丁寧につきあってと仰っていた。災害時要援護者の中に障害者はもちろん入るのだが、この方は脳卒中で二回倒れて片マヒだが、まけないゾウをつくっている。災害時には私は助けてもらわないといけないが、避難所ではまけないゾウを教えるんだという。この人は、避難してからは要援護者ではなくて教える側になっている。こうしたことを含めて、災害時要援護者を考えないといけないと思う。

震災文化を伝えるということ。災害ボランティアの立場から、ボランティア文化とは何かをまとめようとしている。来年の1月17日には発行したいと思う。

渥美先生が言っている「ボランティア活動が文化になるとは、災害ボランティアが定着することではなく、災害ボランティアが代替選択肢を生み出すことそのことが定着すること」という意見に共感する。

今、若者がずいぶんと輝いていると思う。現場に行くときは軽いノリでいくが、いくことによって、いろんなことに気づき学びどんどん成長していくように思う。しかし、社会がこれを受け止める力がない。だから、どんどん自分で頑張っていく。そう考えていたのだが、阪大の鷺田総長が、「全体が見通せなくても、自分にできる小さな役割から果たしていこうという感覚は、いまではかなりの広がりを見せている」と書いている。私たちが気がつかないところでこうしたことも広がっているのだなと思った。

私の講義を聞いた倉敷の看護学生の感想、「一人ひとり違う存在なのに平等でなくてはならない。それは、一人ひとりにとって平等であればいいのだということに気づいた。誰かと誰かを比べていては平等ではいられない。“その人”を見て、その人に平等であろうとすることが大切であるということを学んだ」、すばらしい感性をもった人たちがいるんだなと思った。昨日の毎日新聞の夕刊、見田宗介さんが人、自然、芸術が大事とおっしゃっていた。人間復興とはそういうことではないかと思っている。

<ディスカッション>

山中 鳴海先生が必要ないものまで建設したということ、そういう意味か？

村井 ここに書いている。倒壊した数と、実際にできた数が異なるということ。

山中 それだけ必要ないのかということ？

室崎 四十万戸壊れたなど情報がながれる、するとそれを見た業者が、今つくと「もうかる」となり、どんどんつくる。すると、空き部屋が増えてしまって、結果的に家賃を下げた。市場の論理でいくとそういうことになる。

永松 確認だが、もう一つの社会について議論されているが、紹介されている事例はもうひとつの社会にむかう実践の例なのか？

村井 そう。

永松 全体が見通せなくても、できることをやっていくことは、行政の復興計画と真逆の発想だ。必ずしも復興の目標の合意をとって始めるのではなく、ひとつひとつの目の前の課題に工夫をこらして立ち向かうということ。

村井 仮設市街地構想もそう。そこから、被災後の街をどうするかという議論が出てくる。余談だが、兵庫県も二段階復興を自慢するが、最初から考えたことではなくて、あとからふりかえればそうだったということ。だから、仮設市街地高層は評価している。

永松 村井さんの発表はこれまでの発表とスタンスが異なるように思うが、かなり大切なものがある。つなぐような議論がここでできれば。

室崎 もうひとつの社会、もう一度社会を作るという復興の根幹にかかわる。そして、さいごのひとりまで、人間が中心であるということ。

宮原 全体について、この研究会は復興基本法と切り離して議論をするということは大切だと改めて思った。それは、最初にこの研究所ができた時にも、基本法にしばられるものもあった。こうした思想的な、理念を考えることがとても大切ではないかと思う。たとえ、基本法ができて議論するに値するものになると思う

我々の生き方、暮らし方ということを災害を機に思い起こさせられるということ。話を聞いて思ったことは、災害復興を考える時も、単純にわれわれがもっている欲望にこだわるのではなくて、その欲望が古い社会の欲望であることもある、なんでもかんでもその欲望に沿うのではなくて、復興というのを考える時にあくまで私的なものとして考えるのではなくて、あくまで公共的なもの、みんなの問題として考えることに価値があるのではないか。「私は失ったものを取り戻したい」、それは大切かもしれないが、それが公共的なものの中で語られているということが大切ではないか。これは、社会科学全部の問題かもしれないが、公共的によりよい社会がどうあるべきかを考えることが大切ではないか。政治家であれば、みんなが欲しがるものを与えればいい。それとは異なる次元で考えることが大切ではないかと改めて感じた。もちろん、社会を公共の問題として考えるということ、被災者の声と言った時も、私的な欲望なのか、公共的なものなのかを考えなければならない。

村井 「人間ひとりで生きていかれへん」という言葉、本当にそう言ったかわからないか。テレビで真野地区の在日のお母さんが、味噌汁を食べながら泣きながら「人間一人で生きていかれへん」と語る、個人の声がそこでみんなに共有される。先生の公共性と通じるのではないか。

宮原 全く共感する。面白いのは、村井さんのような方が、含みとしては、みんなが考えていることを掬いあげることが大切、その含みとしては、たとえば家だったら、考え方によっては木造の方がいいというものもある。変な構造になっている、票になるのであれば、こびたことをいえばいい。そのあたりは、大学にそういう場があるということが大切ではないかと思う。

村井 ひとついいわけ。この前、退官された市大の先生に言われた、木造住宅は確かにいいかもしれないが、火災を防ぐためにどれだけ苦労してきたんだと言われた。

室崎 伝統的な木造建築は火災に強いですよ。

村井 知らなかった。台湾で一部損壊の家が燃えたが、柱がのこっていた。すごいなおもった。

渥美 4点ある。一つ目は、コメントだが、村井さんの発表の中には固有名詞が出てくるほど細かなところがでてくる。室崎先生の図の中には復興バネが出てくるが、そのバネに固有名詞が出るほど接近したいと思う。村井さんの根底にある思想では、人もモノも一緒やというところからスタートしているように思う。室崎先生の仰った「都市より人間だ」ということ、どちらもあると思う。復興を考えるときに、建物というモノや、制度、ヒト、モノ、ということを本当に分けて考えた方がいいのだろうか、ということを考えていると思う。モノの復興でなければなくてヒトの復興、それでいいのだろうか。また、つながっているようで、質問が二点ある。復興バネは比喻で述べているのか、それとも専門的に考えられているのか。村井さんの「神さんの罰や」など、詩的な表現がある。こうした、あまり説明のいらぬ言葉、このような表現と、一方で論理的な文章を書いている私たちをどう考えるか。室崎先生は総論ははやく各論はゆっくりと言うが、村井さんの話だと各論こそはやくとおっしゃっているように思う。総論と各論の論理構成を知りたい。

宮原 同じ言葉を使っている、響いているものがある。それを考えるとき、復興は何かというものを考えないといけないと思う。関東大震災の時にすでに帝都復興という言葉が使われていた。いままでのようにこの言葉が使われてきたのか、ある程度客観的に分析できるのではないか。すでに使われている言葉で、自治体にも「復興」の部局さえある。前の調査では、復旧+アルファ、ハードではなくてソフトなど、もやとした理解があることを示した。これらをきちんと把握した上で議論すると、もう少し明確にできるのではないかと思う。

また村井さんの言葉が詩的だということ。復興という言葉に感情的なものが含まれているとおもう。復興にはよろこびがある。やられたけどよくなったということ。よろこびがあり、vitalという、生きている感じがある、活気と元気とか。どうしてもこの次元は、経済的なものではありえないし、被災地に何年かぶりにもどったときに、そこに感動がある、この次元は無視できない。この混沌としたものは、計画からこぼれるものがある。芸術と同じ、音楽を作曲するときも、最後は弾いてみないと分からないということがある。実際にそこで感じてみないと分からないということが、復興の中にあるのではないか。それを含めた上で、制度設計ができるのではないかと思う。村井さんが詩的な言葉を語るのは偶然ではないと思う。感性的な次元、集合的な。単純な社会科学の次元で指標化になじまない部分があるのではないか。

永松 指標化はずいぶん先の話としておいておいてもいいのではないかと思う。室崎先生の話や、村井さんの話をクリアにしていくような議論ができないかと思う。

室崎 渥美先生への返答。都市復興と人間復興を対立させたつもりはない。都市が良くなるということは必要条件、しかしそれだけでは十分ではない。では人間がちゃんとすればよいか、人間の中には心

がある、非常に複雑な関係。最終的なものは、人間の心が幸せであるということ、では、それをどう実現するのか。そのためには、暮らしや生業があり、そこには都市のインフラも関係してくる。今までは自分はこの評価のしやすいものにこだわってきた。すると、固有名詞が見えなくなってしまう。昔から面々と連なる復興の考え、ロンドン大火から始まっているもの、形でしか見えていないものがあった。関東大震災もそう。ついでに言うと、関東大震災の復興計画を見た時に、社会浴場はどうかというものをみるとまた違った視点が見えてくる。人間復興から都市復興を見るという立体的な見方が出てくる。

バネの話は、昔は復元力という言葉を使っていた。復元力、というと技術者が何人いる、オープンスペースがどれだけあるかという話になるが、すこし感性的になるということは人間を見るということと共通しているのかもしれない。バネというのは運動論があるので、そこではたとえば反省のばねというのがある。

村井 神さんの罰あたった これは詩の中の言葉で私が言った言葉ではない。私はあまりこういう表現はしない。阪神・淡路大震災に関わるなら、宗教者としてどう生きるかをかんがえられなければならない。しかし、宗教者はサリンの方に関わった、お釈迦さまにも震災は防げなかったと。

総論と各論、とりあえず目の前のことを優先してやってきた。そこにいる苦勞した人間が語ったことを真摯に受け止めたい。宮本常一が言っている。彼は話を聞く時にノートを取らなかったそうだ。それだけ、真剣に向き合ってきた。

渥美 ポエティックなこと、大切だと思っている。室崎先生が仰っている、こころということには心理学者として議論したいことがある。村井さんがいう、現場に行くと総論が見えなくなっていることはわかるが、総論めいたことを言うてみるのが大切な場面があるのではないかという意味だった。

室崎 神様の罰、これは重要な話。天嶮論には二つある、ファシズムの原点に行く面と、反省しなければならない点はエンゲルスにいく。自然が報復する。人間がむやみに開発するからこういうことになる。

矢守 室崎先生と村井さんの中でつながったと思う点は、神様の罰があたったということ。本当の神様の罰があたったという意味を考えると、災いが来たという原因を人間に帰属させている時点ではまだ本当の意味で神様の罰であったと考えているのではない。人間がどのように組み立てていても、そのようなことがあるということが、神様の罰ということだと思う。美の話、音楽家の話、弾いてみないと分からないということや、イチローみたいなむちゃくちゃ努力している人が、最後に「運ですよ」と言うから、運とか美というものが力をもつのではないか。事前復興というものも、準備に準備を重ねた時に残るものがある。しかし、それも何も準備をしていないものが、起こってみないとわかりませんよと言った時には急に迫力がなくなる。人間の英知を積み重ねていく迫力の上に立った「神様の罰だ」という言葉に意味があるのではないか。

永松 前回の議論とのつながりとして議論したい。前回の中林先生は地域復興力という話をした、これと復興バネは異なるのか。

室崎 異なるだろう。

永松 中林先生は、なにか鍛えることができるものとして、室崎先生は人間に本来備わっているものとして捉えているということか。

室崎 原点は、震災で実際に生じたということがある。「なにくそ」とがんばる心のばねと、原因究明をきちんとし、その原因を取り除こうという反省のばねと、三番目は、いろんな支援が注がれるということ。地域力とは関係なくでてくるものだと思う。

永松 単純に逆境に直面した人間が出す本能的なもの？

室崎 それを支える地域の力もある。

菅 危機ばねという言葉が中山間地域の話の中である。小田切徳美という人が言っている。危機的な条件におかれて、何か協働すれば何か打開策があるというところに共同性が発揮されるということをしている。制約された状況が逆説的に潜在的な力を引き出すということ。制約された状況をどう使っていくのか。

永松 まだ何となく分からない。

室崎 説明しやすいでしょ、なにくそがんばろうという。

永松 詩的な言葉としてつかえればいいのか。

宮原 人類学の中でよくある議論として、葬式をなぜやるのかという議論がある。団結を高めると。大災害があった時に、ソリダリティをかえて高めるということではないか。

室崎 そうしたことだと思う。危機バネと同じ。

永松 支援や原因の話が入ってくると分からなくなる。

室崎 それぞれ別のバネとして理解すればいい。10年間のまちを一気につくる予算が集まる。将来の計画まで一気にやる。そのことを言っている。

津久井 復興とは何かのところ、バネのことを書かれている。バネという言葉で、そうした作用が復興なのかと思った。



室崎 社会状況によっては元に戻る事が最良であることもあるだろう、しかし歪みがある社会では新しい社会をつくるしかない。

永松 バネは誰かにひっぱってもらうのではなく、内発性を議論している点に我々は魅かれているのではないか。

室崎 もちろん内的な力。

山中 内的に変わろうとしても変わらないから、よそもの、わかもの、ばかものがある。

室崎 被災地から見れば、そうした支援のばねがあるということ。

村井 永松さんが気になるのであれば、ばねの専門家に聞いてみればいい。

永松 違和感を感じるのは自分だけなのだろうか

菅 渥美先生が整理した3番目で言っていた、理論的な言葉なのか詩的な言葉なのかということにつながるのではないか。今日の話で考えたのは、現場の話に戻っていく言葉であるということ。個々の具体的な事例の中にベースとなる貴重な価値をもっている。

永松 内発性のメタファーとしてという言葉で腑に落ちた。

渥美 メタファーということであれば、どんどんつかえば、思わぬことが出てきて面白いと思う。ただ、論理じゃないような言葉をどう扱うか。矢守先生のイチローの言葉、「それでも運や」ということ。野球に興味のない人や、息子の野球が一番やという人もいる。残滓にメタファーがあるのか、それとは異なるところにメタファーがあるのか。

永松 言葉で語って語って語りつくせないところでメタファーがでてくるのであればいいが、いきなりメタファーが出てくると。

室崎 復興バネは、現場でいえばみんな分かる。

山中 復興とは前よりよくなるといけないうこと、いつも違和感を感じる。終焉していく村のターミナルケア。内村鑑三が行ったこの国のありよう。復興バネを働かせて、よりよいまちをつくらうということではないのではないのか。復興は前より良くなることなのかということをもう一度議論したい。

室崎 よくなるとは何か論点、しかし社会は進歩していく。進歩は何かを考えないと思う。

山中 進歩が何かということに合意がないのではないのか。

青田 四川の木造建築の重要さや、イカのとりかたなど、何をもって進歩というのかをもう一度再確認したほうがいいのではないかと思う。

山中 空間復興の場合、理想的な復興は軒並みをそろえたり、密集地をなくしたりということ、そこに森ビルをたててということを石原慎太郎も考えている。

室崎 軒並みをそろえるということと、森ビルを建てることは完全に矛盾している。

永松 議事録を取っていて発言機会の無かった宮本さんと石川さんはどうか。

宮本 記録を取るのでは考えられていない。ただ、議論が煮詰まっているように感じる。「何を以って進歩とするのか」。その主語が問題。「誰にとって、何が進歩なのか」。ここで議論していることと、現場で議論していることがつながるのかどうか、違和感がある。

石川 記録を取っていたのであまり考えられていない。これまで中林先生のもとで事前復興について考えていたが、訓練時の被災状況設定などは工夫していったほうが良いところもあると思う。また、自分は東京の木造密集市街地の修復型まちづくりと市民参加に関する仕事をしていたので、東京都の復興ランドデザインの木造密集市街地の復興像については若干違和感がある。矢守先生や室崎先生がおっしゃったように「事前復興」をしておけば全てうまくいくというわけではない、ということを入りながら事前復興について考えていきたい。

山地 ここでの「復興」の議論が普遍的ものを指すのか、あるいは先進国、日本に向けての議論なのかがまだよくわからなかった。経済についても、経済成長を前提とした経済のことであるのか、あるいは、(個人の)経済の安定性についての議論であるのかが整理がつかなかった。室崎先生の言われる「人類の幸福」は重要な事で、普遍的な議論のためには、本日(村井さんの報告の中に)でてきたアマルティア・センやロールズ、公共性についてはハーバマスなどの理論を抑えていくことが必要だ。私は福祉国家論の立場から災害復興を考えていきたいと思う。

近藤

現時点では十分整理しきれないが、発表の機会を与えてもらっているので、その場で改めてお話ししたい。

安富

途中参加なので、特にない。ただ、「復興バネ」という言葉は、読売新聞の中で語るのはまだ理解してもらいにくいかな、というのが感想。復興バネを Wiki で書ければと思う。

